

～ 昨日の風 明日の風 ～
経営コンサルタント
独白録

[第110回] 極東の経営



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、(株)経営改善支援センター(福岡市、URL: <http://sien.co.jp/>)代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

一般的な日常生活で「極東」という言葉は使いません。これは19世紀に世界の中心はヨーロッパ(特に英国)であり、また植民地政策を考える視点から世界を区分する際に、近東・中東・極東と西洋人が呼んだものです。メディアでは今でも「中近東」と表現しますが、極東はめったには使いません。日本では1941年に内閣情報局がメディアに対して欧米的な表現を禁止した歴史と、第二次世界大戦の敗戦国である日本を裁くために「極東軍事裁判」を行った経緯があり、日本の中ではあまり好まれて使われる区分ではありません。

しかしながら、凄まじい勢いで政治体制や経済、文化のグローバリズムが進む中で、日本の正確な位置と独自の価値観を知るためには我が国が「極東の島国」であるという現実を今一度見つめ直すべきではないかと考えます。

仕事と生活

ある日、若い人たちを対象にした社内研修が終わった後に質問時間を設けたところ、ある男性がこういう質問をしました。「先生は仕事と生活のどちらが大事だと思いますか？」参加した十数人も興味を持っていたようなので次のとおり、少し丁寧に答えました。

「今、君は仕事と生活というVS(対立関係)として2つの事柄を並列に並べて質問しました。これはいわゆる一神教(キリスト教・ユダヤ教・イスラム教)の国家で物事を考える時によく使われる手法です。例えば、善と悪、光と陰、天使と悪魔、肉体と精神などとすべてを並列的に考えようとします。それに対して東洋的あるいは日本的には2つの事を考えるときに重なり合いという考え方をします」

「昔の日本人は、と言っても今から30年位前のことですか、多くの日本人はこのように考えていました。【きちんとした仕事をしなければきちんとした生活が送れない。きちんとした生活を送ってなければきちんとした仕事ができない】つまり、仕事と生活は対立構造にあるのではなくて、人間が生きていく上で重なり合っていてどちらを優先するかなどという考え方はありませんでした。ところが、昨今はグローバリズムという大きな波の中で西洋的な一見合理的な思考が大勢を占めどうしても対立構造として考えてしまいがちです」

「戦後社会主義的な考え方が広がり、会社経営を

資本家と労働者に分けるという考え方が広まりました。それ以前は社長も働く人も仲間と言う考え方が主流だったのですがここにも対立構造があります」

「質問の答えになっているのかどうかかわからないけれど、そうした国や文化の違いを理解して物事を考える必要があるのではないのでしょうか」

価値観の防衛戦

私の話を聞いて、わかってくれたような様子の方は2、3人だったでしょうか。多くの人たちは理解できないような表情をしていました。

企業組織において現在最も重要な事は「価値観の共有」です。膨大な情報と目まぐるしく変化する社会情勢において、働く人たちの意識は絶えず揺れ動いています。昔のような緩やかな時代ではありません。「仕事は金を稼ぐことだ」「別にこの会社でなくても良い」「もっと楽して給料を払ってくれるところがあったらそちらに移りたい」という考え方が良い悪いではなく一般的になりつつあります。それもまた時代変化です。その時に、個人の生活や家庭を守るためには所属する企業で守らなければならないのだと言うことを組織に伝える必要があります。こうした価値観を共有しなければ離職者が相次いでしまいます。

立ち止まり考えるべき時

第二次世界大戦後、日本を約8年間占領したGHQ(連合国最高司令官総司令部)は日本が再び軍事大国にならないように、様々な日本の価値観を潰しました。勤勉な民族を呆けさせるために「3S(スポーツ、スクリーン、セックス)政策」を振興させ、戦前の出版物7千冊以上を発禁処分とし、教科書を黒塗りにして民族固有の価値観を抹殺しました。勤労という言葉や労働と置き換え、働く意味を失わせ、仲間より個人を優先させ連帯すら失わせつつあります。戦前の書籍を発禁する恥ずべき作業を行ったのは東京大学の文学部でした。名だたる出版社やメディアもその片棒を担ぎました。

コロナやウクライナ紛争や円安など今まで想像もしていなかったような出来事が新たな歴史のステージに登場しました。自由主義や資本主義すら本質を問われかねない時代です。今一度組織防衛のための抜本的な思考が必要ではないかと本気で考えています。